

「ベストプラクティス事業」の2事例目として、インドで活動する PALLISHREEの事務局長・Durga Prasad Dashさん、代理人を務める岩崎慎平さんにお話を伺いました。



事業名

▶インド国バフダ入江湿地における強靱なコミュニティ構築のための気候変動適応に向けた住民参加型環境教育と生計改善の実践

助成内容

▶2016～2018年度 ひろげる助成

助成金額(千円)

▶('16)2,400 ('17)2,400 ('18)3,000

PALLISHREE

管理事務所 ▶502/2 Mallick Complex, P.O.-Khandagiri, Bhubaneswar-751030, Dist-Khurda, Odisha, India

T E L ▶+91-674-2351350

U R L ▶http://www.pallishree.org/



住民と地域の課題を共有することで 皆の手で活動が続いていく

1. 活動について

湿地の環境保全や地域資源の賢い活用を通じた、気候変動リスクに負けないコミュニティづくり

PALLISHREE(パリシュリ)は、1986年に熱心なボランティアが集まって設立されたNGOです。団体名の由来は、インドの言葉で「美しい村」。その使命は、湿地の生態系保全や住民への環境教育により、地域コミュニティを強化し、

生物多様性の保全をしながら生計向上も支援すること。自然資源の賢い活用による、気候変動リスクにも適応する持続可能な地域社会づくりが、PALLISHREEの活動の特長です。2016年から2018年にわたり、PALLISHREE

では、インドのバフダ入江湿地における気候変動リスクに対応する強靱な地域コミュニティづくりのため、住民が主体となる環境活動の実践に取り組みました。



毎年約2万本のマングローブを植林し、湿地再生を目指す



地域住民へ事業の進捗を共有する

2. 活動の成果と助成金の活用方法

地域の学習センター(LCCR)を拠点に、住民参加型の環境教育・生計向上支援を実施

バフダ入江湿地は、インド東部のオディッサ州とアンドラプラデシュ州にまたがる地域に位置し、それぞれの州の文化や使用する言語も異なるため意思疎通が難しく、気候変動リスクに対する政府からの支援も困難でした。この地域の環境を保全し、地域の人々の生活を支援するため、3つの目標が掲げられました。

- 1.気候変動リスクに適応するコミュニティの強化
- 2.湿地における生物多様性の保全
- 3.漁業者が責任ある漁業を理解し、適正な漁業資源管理を実践

この3つの目標のもと、21の活動が実施されました。マングローブを年間約2万本植林、清掃美化・環境測定・環境イベントなどを通じた環境教育の推進、女性の自助グループを集めた環境に配慮

した生計活動の研修、漁業資源の枯渇につながる網目の微小な漁網の禁止を図るワークショップの実施…こうした幅広い活動の全てに、地球環境基金からの助成金が活かされています。

この事業では対象地域内の10村の学校に設置した「強靱なコミュニティ構築のための学習センター(LCCR)」を拠点に、生徒に加え学区内の住民が参加する環境教育・環境保全・生計向上支援を実施しました。これは、生徒や住民が地域の環境課題を自分ごととして捉え、環境に配慮した生計活動への気づきを促すことで、生徒や住民による主体的な環境活動につながっています。

2017年には、LCCRの参加校の一つがオディッサ州政府から名誉ある「Nature Friend賞」を受賞しました。「同賞は州内の最も優れた環境活動の担い手に贈呈されるもので、学校内および周辺における教師・生徒らによる植樹活動の実績が評価されました。また、本事業を通じて触発された地域住民が自発的に、海岸のゴミ収集を



生徒自ら地域の環境モニタリングを実施



気候変動適応教育を受けた生徒たちによる成果報告

伴うフェスティバルを企画しました。このフェスティバルには7日間でのべ5万人が参加しており、地域住民を巻き込んだ環境教育の成果といえます。」(PALLISHREE事務局長・Durga Prasad Dashさん)

さらに、3つの学校が政府から表彰されたことに加え、住民の能力向上による出稼ぎ労働者の減少、女性への就労機会の提供、水産資源の維持を考慮した漁法への転換など、多くの成果を得ることができました。

活動のポイント

「壁」を超えるのは、丁寧な対話

言語も文化も異なる2つの州の「壁」を乗り越えるため、本事業では2つの州の言語を話せるスタッフを確保し、活動実施前に住民への説明を念入りに行いました。また、漁法の転換などに反発する漁師もいましたが、私自身が漁師の集まりに向いて活動の意図を説明しました。住民とともに活動を進めていくには、対話で出た意見を取り入れることが不可欠だと思います。



(Durga Prasad Dashさん)

3. 助成終了後の活動

地域コミュニティ主導で事業を継続・拡大していく

PALLISHREEでは本事業で得た経験を基に、地球環境基金の助成を得て、新たに活動計画を追加し、バフダ入江湿地での活動を継続しています。その一つ「環境保全型クラブバンクの推進」では、この地域でよく採れるワタリガニについて、抱卵しているカニを肥育施設におき、卵がかえるまで飼育。適切な水産資源の管理を図っています。

また、海岸のプラスチックゴミを率先して清掃する「プラスチックフリーエリアの開発」も推進しています。バフダ入江湿地以外にも、同様の自然環境課題を抱え、ヒメウミガメの産卵地として知られるルシクリヤ河口においても活動を始めました。「本事業の終了後もLCCRは存続し、住民が主体となった持続可能

な地域づくりを担っていきます。住民一人一人が自発的に活動を続けるための意識づくりが、PALLISHREEの目指すものです。」(Durga Prasad Dashさん)

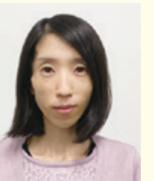
PALLISHREEの活動によって、環境保全と生計向上を実践する「美しい村」が広がっていきます。



クラブバンクから、約1億5600万のワタリガニの卵を放流した

基金担当者から

住民と地域課題を共有し、対応策を検討していくために、何度も対話の場を設けるなかで、いつしか「住民自身が考え、行動する活動」となっていく姿が印象的でした。今後も地域住民が協力し合うことでこれまでの活動が継続され、地域の環境が皆で守られていくことを願っています。



(地球環境基金 西岡)